

3日目

宇陀郡御杖村土屋原 ~ 飯南郡飯南町横野 約33.4km

土屋原(まつや) - 桜峠 - 菅野 - 牛峠 - 神末 - 佐田峠 -
敷津 - 岩坂 - 奈良・三重県境 - 杉平 - 払戸 - 石名原 -
奥津 - 銅坂峠 - 上多気 - 立川 - 奥立川 - 峠 - 櫃坂 -
上仁柿 - 下仁柿 - 横野(待月)



3日目は宇陀郡御杖村土屋原の「まつや」から、奈良・三重の県境を越え、一志郡美杉村、飯南郡飯南町と進んで、同町横野の「待月」までのおよそ33km。峠越えを含むこの距離は存外厳しい。2日目との差は約2時間分。これが大きな壁のように立ちはだかってくる。8時半スタートの原則を8時に繰り上げて、この日の旅館到着は夜のことが多い。第1回(1986)実施前に、2日目の宿舎は土屋原でよいか、距離配分が問題になり、第2回(1987)の前にも菅野への変更が検討されたが、適当な宿舎がなく現行日程で定着した。追々記すが、日が暮れてから待月までのつらさは独特のもの。まつやさんの大儀さは重々承知しているが、この日の朝の「30分」にはどうしても譲れない重みがある。

土屋原

まつやを出発、一路桜峠へ向かう。ゆったり蛇行する土屋原川（青蓮寺川上流）を右手に、農協前のゆるい上り道に行く。山裾に突き当たって右に曲がり、ちょうど岬をまわるように今度は左へまわりこむ。「岬」の先、道路右側には消防署、左手には「岬」に上がる階段があって、登れば白藤稲荷がある。

川は堂前付近で笹及川と二手に分かれる。土屋原バス停前の三叉路辻に「左いせ 右はせ 世話人 藤助 南かばた」の道標がある。「かばた」は伊勢国飯南郡川俣のことで、請取峠越と呼ばれたルートである。御杖村と榑田川流域を結ぶ諸道の内では最も重要であったが、急勾配のため近代交通路としてはほとんど用いられなくなった。本街道はこの道標前を直進する。

道標前を過ぎるとすぐ家並は途切れ、約150mで村民運動場からの道が合流、そのすぐ先に、左側の山へ上がる細い道が付いている。こちらが本来の旧道で、『道中記』の調査で発見、第7回(1992)から通行を開始した。これを上がると民家（芦谷家）の前に出る。東隣の笹木家が旧道上に小屋を建ててしまいこの先は通行できないので、簡易舗装の下り坂で新道に戻る。旧道はこの先笹及の集落内まで、芦谷家付近と同じくらの高さを保って、国道北側の林の中に続いていたようだが、谷にかかる橋もなくなり、わずかに痕跡を留めるのみである。

新道はその旧道の下、谷の北側山際を通っている。右側にはわずかばかりの田が並んでいる。300mほどそうした風景のなかを過ぎると、土屋原笹及の集落に入る。旧道との合流点は、確認することができない。

集落内の道は、カーブをくりかえしながらゆるい上り勾配になっている。この付近は谷の対岸でバイパスの工事が始まっているため、現国道の改良はほとんどされていない。集落中央付近、右側の少し引込んだところにメナシ地蔵がある。昔、このそばには庚申像もあったが、土中に埋没し、大正11年(1921)発見されて北京橋付近に移転したという。

桜峠

まつやから約2kmで笹及の集落も終わり、桜峠への登りにかかる。現在の国道369号線は山の尾根を断ち割って通じているが、旧道は若干北側を通っていた。享保3年(1718)、この桜峠において、大坂の元締による銀鉱開発の話があり、明年2月中旬まで掘ったものの、鉱脈には当たらなかったという(御杖峠(山崎磯蔵))。

国道は笹及の集落を過ぎたあたりから、この先菅野を経て牛峠頂上まで改良が終わっており、カーブや勾配の緩和された、美しくかつ無愛想な2車線が続く。注意して見ると、所々に使われなくなった旧道が残されていたり、道幅が不自然に広がっている所などがあって、改良以前の姿を残している。かなり以前から休業中の焼肉店（「峠純」）付近でゆるく右にカーブし、左に向き直ると大きな切り通しにかかる。現在の国道はこのまま直進であるが、この手前左側に「桜峠」と記した表示板があり、左の山道を指示している。これが旧桜峠の取り付け点である。この旧道は、宝来講でも第4回(1989)まで存在を把握していなかったが、第5回(1990)の下見で表示板を発見、第6回(1991)で調査班が、第7回(1992)から本隊がそれぞれ通行を開始した。

この旧道に入ると、しばらくの間は未舗装ながらも車道だが、峠とは逆に左へ曲折してしまう。直進すべく前方を見ると、曲折点から20mほど先の右側に、ボーイスカウト榎原第1団による小さな木の標識が立っており、「伊勢本街道 桜峠」の文字も見える。ここで車道から右へ分岐、左手の杉林と右手の休耕田の間の細い道を進むと、50mほど先で休耕田が尽きて、杉林の中に入る。この付近は日当たりが良いためか踏跡がうすく、他の峠の入口よりも分かりにくいかも知れない。

道は林に入ってすぐ右側に切り返すが、これを過ぎればつづら折りなどの難所も迷うような分岐路もない。国道の桜峠付近にはおだやかで緩い峠という印象があるが、旧峠も全く同様の印象を与える道だといえる。ただ、あまり手が入っていないのか、倒木が多い。だらだらと林の中を上っているうちに、気がつけば峠である。『新撰伊勢道中細見記』には「小坂也」とあるから、近世の人々も同じ印象を持っていたのであろう。また「峠にさくら木多し、此ゆへに峠の名とす」とも記す。現在は桜の木は見当たらないが、地元の方の話によると、峠の北側には4～5本の桜があったという。また、峠南側の平坦な植林地は一見して家屋跡とわかるが、これは茶店の跡である。

下りも上りと同様の緩勾配がつづく。杉林を抜けると左側の築山の上に小さな稲荷社。正面には大和棟の残る前谷の集落が見えてくる。畦道を右に左にと渡って集落に入り、民家の前を抜ければ、右側から近づいてきた国道に合流である。もともとは民家の並びに沿って進んでいたようだが、現在は庭に取り込まれて通行できない。このすぐ先の間井谷（前谷）橋から国道の左側へ分岐すれば、旧道に戻る。旧道は、以後二度にわたって国道と離合を繰り返している。最初の旧道には兵士慰霊塔がある。薪を積み上げている家を多く見かける。民家は左手の山際にあり、山崩れでもおきそうな場所である。平地がないわけではないが、あとは田畑である。高い建物がいないためか、狭さを感じない。

200mほどで国道と合流、すぐ左へ入る。100mほどでまた合流するが、その直前から再び左に入る。ここが、菅野の宿場へ向かう旧道と、役場前経由で牛峠頂上へ直行する国道・御杖バイパスとの分岐点になる。旧道に入ると廃車の山の後ろに三本、ひょろ高い木があり、さらに石倉モータースの隣には藁葺き入母屋の家がある。土屋原から菅野まで約4km、1時間ほどの道のりである。

菅野

菅野の旧道に入ってすぐ、左手に墓地がある。古伊勢道は、この墓地の山手を通っていたともいわれる。本街道を墓地から100mほど行くと、街道の右手、細い川の対岸には数軒の家が並んでおり、このうちの井上家の庭には、集中豪雨の際、付近の川から発見されたという道標（「右いせみち 左はせみち」）が建てられている。この道標は第7回(1992)に偶然発見した。

この先に三叉路があり、左から道が合流してくる。これを左へとれば、すぐ前方右手に室生寺別院の安能寺が見えてくる。室生寺創建前の「女人高野」であった。茅葺の門が印象的である。

街道は三叉路を直進して川沿いに進み、常夜燈と道標の立つ丁字路に突き当たって左折している。「太神宮」常夜燈は天保3年(1832)のもの、道標には「左いせみち 右はせみち」と刻む。ここが菅野の町場の入口にあたる。菅野は『新撰伊勢道中細見記』に「馬駕籠立場休所」として茶屋・宿屋ありと記されているとおり、笹屋（明和5年(1768)の『伊勢道中案内』に定宿として記載）・丸屋・井筒屋・油屋（安永～文化年間）などの宿々が営業していた。本居宣長も明和9年(1772)にこの地を通

過したが、雨天に難渋して「同じやうなる山中にて、何の見どころもなかりし」と簡単に記述するのみである(管脚)。

この辻の右手にあるのが駒繫橋で、「駒繫」の名は、その昔倭姫命が神鏡奉安の地を探している間、馬を繋いでいたという伝承からきている。この橋を渡れば正面が御杖村役場。さらに南進すれば白髪峠越えて伊勢に入れるが、前述の請取峠以上に急坂のため、地図上では半ば廃道扱いである。なお、峠には大日如来像があるという。

『細見記』の「立場休所」にならうわけではないが、一行はここでサポート隊と合流、一息入れる。まつやのトイレが絶対数的に不足しているため、早めのトイレ休憩も兼ねている。トイレを拝借している御杖村役場に隣接の山村開発センターには、昭和63年(1988)の「ならシルクロード博」に出品のため複製した道標・常夜燈が置かれている。実物のこれほど至近に置かれているレプリカというのも珍しいだろう。

道標の辻を左折後は、ゆるやかなカーブを描いている菅野の町の中を進む。菅野小学校・菅野幼稚園を左に見るあたり、ネズミ色トタン屋根の民家の前に「左はせ十八里 右いせ宮川へ十五 [里?]」という道標があり、この辻を右折する。この道標は長らく菅野小学校が保管してきたもので、最近になって原位置に復した。書体などから、行悦の回国供養碑のひとつではないかと考えられているが、他の供養碑に見られる「回国供養」「菅野村行悦」などの文字がなく、詳細はよくわからない。このほか、「右いが道」と記す道標も平田家に保存されているというが、この原位置も不明という。

道標の角を右折後すぐ、青海建具店前を左折して、道は鍵の手状となっている。左側に菅野小学校が見えるが、この北側の丘陵地はかつて菅野城があった区域であり、中世この一帯は伊勢北畠氏の支配下にあった。

標札のとなりに小槌型の木札を置いた家がある。桃俣春日神社では、遷宮上棟式のさい村の子供たちが出仕し、用いた小槌を家の門口にかけておく風習がある。これと関係するものであろうか。

町場が終わりに近づき、民家も町家風から農家風へと変化を始める。両側に並んでいた家屋が左側

井上家前の道標 (原位置は不明)



本街道に背を向けて建つ四社神社



だけになると、右手にこんもりとした^{しし}四社神社の森が見えてくる。大和地方から伊勢に参詣する道者は常にこの神社に参ったといい、倭姫命御手洗い井戸「御井」を残す。この神社は延享4年(1747)頃まで春日神社と称していたが、明和7年(1770)になると「四柱大明社」といわれるようになった。祭神は天兒屋根命、大日靈貴命、蒼田別命、伊邪那美命である(一説には天照大神、春日大神、八幡大神、熊野大神ともいう)。四社神社の社殿・参道は街道と逆の南側を向いており、神社の南側を流れる菅野川に面して鳥居が建っている。参道は街道を向く例が多いので、もともとこの鳥居前を街道が通っていた可能性も否定できない。道は井手谷橋を渡って右にカーブ、すぐ左に曲折する。

牛 峠 へ

「旧伊勢本街道跡」の標識が左を指している。畑へ上がる道のように見えるが、これが旧道である。ただしこの先の御杖中学校運動場が旧道をふさいでいるので、ここは新道を進む。

庚申塔を右わきに見て、真新しい御杖郵便局前に至る。以前は菅野郵便局と称していたが、改築を機に名称も改められた。新局舎は外観に木を生かし、大屋根が印象的な洒落たデザイン。菅野の街中であれば街道風の外観を求めたいところだが、この付近にはこれもなかなか似合っている。

道は菅野川に沿って進み、左手には旧道をふさいで建つ御杖中学校が見える。菅野東郷バス停前の丁字路から細い道を左に入ると、中学校の東門前に出て、ここで旧道に復帰する。車一台ぎりぎりの細い道で、曲折をくりかえしながら家並の中を進む。この辺に来ると山との間隔がせばまってくる。家々の屋根はトタン屋根が多いが、もとは大和棟であろう。茅葺きの部分にトタンをのせたような家である。家並を抜けると、道は右へ曲がって下りになる。そのまま新道に合流である。

約200m進んでガソリンスタンドの前を過ぎると、右側の無住らしき民家の前に道標がある。「右旧ちか 左新街」と並べて彫った下に「道」の一字をつけている。この道標は、明治に入ってから、牛峠をさけ、菅野川に沿って^{あき}秋葉山を大きく迂回する新道を改修したさいに建てられたものである。しかし「旧ちか道」の方は植林で埋没してしまった。少し行くと御杖村農協共同作業所があり、この手前の角を右折、埋没した「旧ちか道」と合流して、菅野川に架かる菅野大橋を渡る。ここには宝暦年間(18世紀中頃)、すでに橋があったという(『^{くわ}映の調査報告

』)。多少急勾配であるが牛峠は既に舗装されている。登りはじめて100mほど、左側に磨崖六字名号碑とメナシ地藏が立つ。曲折をくり返ししながら、さらに杉林の中を歩く。木のなかには数本、白いペンキで印していたものがある。峠まで約15分。峠の北側の山、秋葉山には天正年間築城の秋葉城(神末城)があり、『奈良県宇陀郡史料』にその図面が残されている。

峠道を登り切ったあたりは山が大きく開けているが、これは国道御杖バイパスの工事による開削。バイパスは役場前からほぼ一直線に牛峠へ駆け上がり、峠の頂上付近で旧道を横切って、^{くま}神末を經由せずに^{しん}敷津へ向かう。十数年来工事が続いていたが、昭和62年(1987)役場から牛峠頂上、続いて平成4年(1992)牛峠頂上から敷津までの供用が開始された。そのバイパスを左に見て、転がったほうがはるかに早そうに思える急傾斜の道を下る。バイパスの工事が始まるまでは、峠西側と同様この付近もカーブの多い道だったが、大改良工事の結果かつての旧道はバイパスの^{のりめん}法面の下に埋もれてしまい、現在の道は、法面に沿うようにほぼ一直線で坂の下へのびている。見渡せば、その一点から道と、道

に沿って等間隔に並ぶ電柱と、両側の斜面が遠近法的に展開し、眼前は四つの山がなだらかな稜線をえがいて左右から折り重なっている。ただし、一番奥の山だけは、鋭角の山頂を天空に突出させている。

神末

神末は慶長18～19年(1613～14)頃、大和国宇陀郡に編入されたが、それまでは伊賀国名張郡に属した。この付近の大和・伊賀・伊勢国境は、荘園領主の権力関係などの事情でも変動しており、自然境界とは一致しない場合が多い。

坂を下ったところを左折すると神末西町に入る。右折して街道を離れれば、南へ400mほどで御杖神社

社があり、倭姫命の神宮東遷伝説を残している。さらに南行すると、神末上村をへて櫛田川沿いに抜ける琵琶越え道となる。天保5年(1834)、神末村がこの道を新設し、菅野・白髪峠を経ずして伊勢川俣に米穀を運送したことから、菅野村と相論を起こしている(脚註)。

さて、町並に入った街道はゆるやかに右カーブを描く。この町並の突き当たりが西町辻。常夜燈と道標が立っている。常夜燈は「太神宮」「文政九年戊辰三月吉祥日」(1826)の銘があり、火袋台の4面にそれぞれ「松」「竹」「梅」と「菊の御紋」を浮き彫りしたもの。なかなか粋な細工で、往時の華やかさを伝えている。

西町辻を右折し、神末川の大橋を渡る。橋の東詰め、大きな表玄関を持つ家は元旅籠の今西屋で、永代屋ともいわれた。文化年間(19世紀初頭)営業していたが現在は医院となっている。この玄関部分は弘化3年(1846)に増築されたもの、家の間取りはダイドコ(台所)部分が突出する整形四間取りで、一般民家と大きな差は見られない。宿泊者の部屋は二階の八畳、四畳、四畳半の間と考えられ、土間のすぐ裏に角屋を設けて土間とカマヤの空間を広くとっているところが、旧旅籠屋としての特徴と言える。神末には他にも、ほうのや・印判屋・神保やといった宿屋があった。

街道は大橋の東詰めに左折。右手には天武天皇勅額があったといわれる東禅寺、左手には川をはさんで神末小学校が見える。小学校の裏山はバイパスの工事で削られている。数百m川に沿って歩くと神末バス停前、辻本商店につきあたる。本街道は右折、佐田峠と呼ばれるゆるやかな登り道に入る。右手の擁壁の上に青面金剛像があって、以前は街道から見えるところに表示板があったが、現在は存在を教えるものが何もなく、一見しては気がつかない。

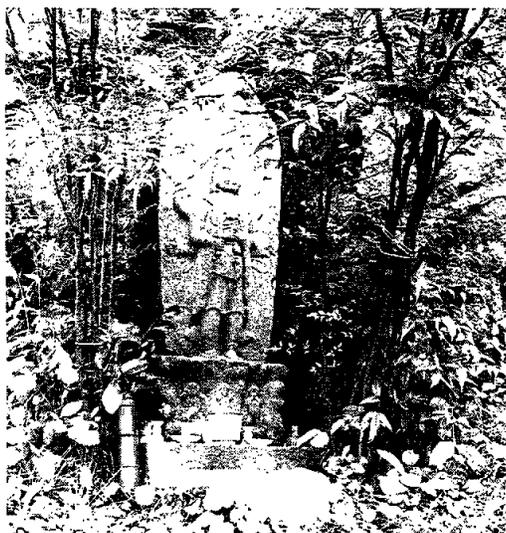
橋を渡って谷の北側に出る。そのままだたら坂を峠へ。大きく左にカーブすると峠である。曲がり角には菅野村行悦の回国供養碑と首切り地藏がある。ちなみにこの供養碑によると、初瀬からここまで9里(約35.3km)、是より宮川まで12里21丁(約49.4km)。首切り地藏は明治の廃仏毀釈のとき損傷した。首から上の病気に霊験あらたかだといひ、全快すると赤の涎掛けを奉納したそうである。

昔は狸や狐が出没したというこの峠も、きれいに舗装されている。上りと同じような道で下ってい

御杖神社

倭姫命が天照大神を奉じて神宮の候補地を探していたとき、当地で一泊しその際置き忘れた杖を祭祀したのが始まりという。ただ、現在の社名は近代になってから変更されたもので、その根拠は近世の国学者による比定である。この点は陵墓の事情と似て、完全な信用は置けない。

鎮座地を求めて大和笠縫邑を発した倭姫命は、菟田の篠幡、さらに近江・美濃を経て伊勢に到ったと伝えられ、神末にしる菅野にしる、この道に沿う地域には、倭姫命にまつわる伝承が多く残されている。神末は古くは「上津江」と書かれていたが、これは“神杖”を意味するものといわれる(カミツイエ→コウツエ)。ただ「上家」の文字も見えるから、伊勢側から大和側を見ての表現の可能性もある(カミツイエ→コウツエ)。



青面金剛像の庚申像

宝来講道中で道標とともに多く目にするのが庚申様である。一般に庚申信仰と言えは「庚申待」を思うが、「申」と「猿」＝猿田彦神との連想から、道祖神としての役目を負ったものも多い。庚申像には様々な形態があるが近世（特に寛文年間）以降、三面六臂の青面金剛が主尊として用いられるようになった。延宝から元禄年間にかけては他の諸尊像の17倍にのぼるといふ。土屋原笹及の青面金剛像は半肉の石彫で六臂あり、三猿を配する。銘文は「寛延四辛未六月日」（1751）。ここ、神末のものは石彫厚肉の青面金剛である。なお宇陀郡下の青面金剛像は六面八臂で鶏・邪鬼・三猿を配するといふ。

き、やがて道標のある分岐点で道は二手に分かれる。道標は牛峠の登り口と同じタイプで「伊勢本街道 右旧ちか道 左新道」と記している。指示に従い、右へ。道標のまわりには花壇が作られており、目を楽しませてくれる。長らくお世話になった「369」の国道標識ともこれでお別れである。

敷津

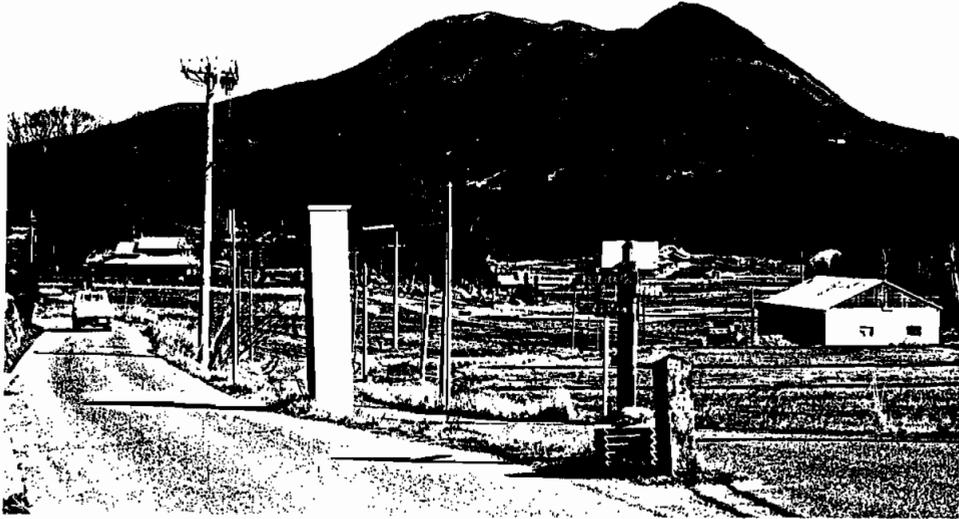
かつて^{さんぼんまつ}三本松と称した^{しきつ}敷津は広い平地となっており、正面に^{おおほら}大洞山(985m)の堂々たる姿を望みながら、水田地帯の一本道を抜けて行く。江戸時代の敷津の目印は、旧村名が示すとおり三本の松だった。残念ながらこの松は焼失して今はない。敷津は榎屋利左衛門の茶屋があり、「今出屋」という宿屋があったといわれているが、国道から外れたためもあってにぎわいはなく、ひらけた水田地帯がかって寂しく感じられる。街道沿いの家も、藁葺き屋根の民家の広い庭に、コイのぼり用の柱がたっているといった懐かしい風情のものから、モダンな洋風建築の「敷津産地化センター」があったりとちぐはぐな一面がある。

この付近の街道も舗装前は低湿地のひどい道であったそうである。そのため山の手の権現神社を通る道もあったが、現在は悪路に苦しむこともない。一段高みにある集落に入って100mほどのところにある十字路には、その「権現神社(右)」のほか「敷津バス停(左)」「丸山公園(直進)」を指示する標識があり、これを直進する。街道右側には「太神宮」の常夜燈が建つ。明治33年(1900)に建てられたもので、「征清記念」とあるから日清戦争の勝利記念であろう。

沿道には皇太宮月見岩、倭姫命手洗い井戸、夫婦岩、弘法井戸などがある。前二者は数ある倭姫命伝説の一部にすぎない。夫婦岩は街道わきにある大小二個の小さな石である。弘法井戸から東へ行ったところに金壺石と呼ばれる円筒形の石がある。毎年元旦の朝、この石の上で金鶏が鳴くといわれた。

岩坂峠から 県境へ

真偽の定かでない伝説の案内板を見ながら、いわゆる「^{じ ねんのぼ}自然上り」の道をだらだらと歩いていくと、小山に突き当たる。桜の名所、^{まるやま}丸山公園である。この手前にある民家(追分家)が、奈良県側最後の



敷津分岐点と大洞山

家になる。まつやから10.1km、菅野から6.3kmである。民家の姓「追分」が気になる。この付近の字名としても通用しているという。

この民家の手前を左側の畦道へ入り、谷の一番北に行くのが本来の岩坂峠道といわれるが、さまざまな変化があってこの部分は通行できない。丸山公園の北側から下る迂回路ができていたので、こちらを通行する。一方、ビニールハウスの骨組みの脇から右へ分岐する農道も、街道として利用されていた時期があったといい、こちらは近年舗装されて岩坂とは対照的である。場合によってはこの農道を「岩坂道」、これから我々の通る道を「姫石道」と呼び分けることもあったようだ。

丸山公園のすぐ北側を通り、すっかり整備された石段を下りて姫石神社に向かう。石段を下り終えたところが姫石明神で、山粕・佐田の宮と同類の原始信仰。御神体にあたる岩盤が女性の陰部に似ているところからその名がある。倭姫命が婦人病の治癒を祈ったといわれ、婦人病または縁結びの神として信仰がある。祈願成就のおりは一尺程度の鉄の鳥居を奉納し、紅白の布を鳥居に吊り下げる。

姫石明神からの下り坂は杉林に突入、大小の岩がゴロゴロして、まさに「岩坂」である。道の中央は雨水でえぐられてしまっており、浮き石も多いので足元には気を配りたい。日が当たらないせいか、木々は細く頼りないものが多いように見える。陰鬱な北向きの谷を、つづら折りで下っていく。

坂の途中の右側に大日如来を祭る小祠がある。大日如来（通称「だいにっつあん」）は神末全体の牛の守護神として信仰があつく、胎蔵界大日の種子と蓮華の台座が刻まれている。もとは伊勢三多気にあったものを敷津の人が持って来ようとしたが、ここから動かなくなり、当地に祀ったという話がある。屋形の部分には文政9年(1826)の銘があるが、碑の本体は鎌倉期のもと考えられている。この付近でごろごろした岩の道は終わり、道はさらにぬかるんで、一部は水路のような状態となる。

岩坂今昔

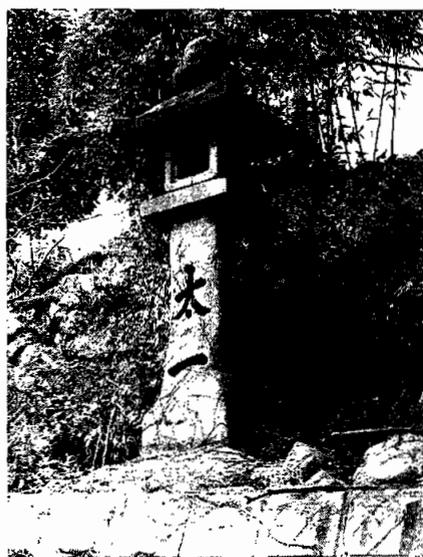
岩坂入口付近は宝来講が始まる以前から長らく工事中で、通行にはずいぶん苦労した。というよりどこかの工事を出た残土を野積みしていたようであったから、正確に言えばここを工事していたわけではないのだが、それだけに潰すのが直すのが全くはつきりせず大変な難所であった。雨・雪でぬかるむ残土の山にルートをつけるべく、ただでも早い「まつや」の朝をさらに早発ちして、先達が先行したこともあった。整備が完了してそうした心配が無用になったのは喜ばしいが、以前の岩坂を知る古参組にとっては、一抹の寂しさ？を感じないわけでもない。

「太一」

大和など畿内の参宮常夜燈は、竿石に「太神宮」と刻むものが多いが、伊勢に入るとこれが「太一」になる。

「太一」は「大一」とも書き、伊勢神宮御用の印である。天照大神を示しているというが、詳細な由来は分かっていない。おそらくは「唯一神明造」の「唯一」などと同じように、他のものとは違う絶対的存在という意味なのであろう。神宮の遷宮の際も、御用材の伐り出し・運搬の各所で「大一」の幟が掲げられるし、遷宮の裏方・神宮工作所の職員が使用している作業帽やヘルメットにも、まるで徽章の如くに「大一」とある。

「太一」燈籠（杉平）



三多気の桜

杉平のバス停に来ると、頭上に「名勝三多気の桜」という看板がある。この看板が目につくにもかかわらず、桜の木は一本も見つからない。名勝の「桜」はどこにあるのか？

看板の三叉路を左へ入る道は、大洞山の山腹にある真福院の参道で、両側には2000本を超える山桜が並んでいる。これが「桜」の正体である。春には桜のトンネルでさぞかし圧巻であろうと誰もが想像するが、惜しいかな老木が多く、想像ほどの華やかさはない。しかし参宮全盛の江戸時代には桜もまだ若木でたくさんの花をつけたことだろう。

時の流れを感じさせる桜並木を、このまま朽ちさせるのはしのびない。若い木を植え、再生を図ってもらいたいと思うのだが…。

追記しておくこと、若坂口の丸山公園にも数百本の桜の大木があるが、ここも年を重ね、花をつける力を残す木は少ない。

六部経塚は大日如来碑からほどなく下ったところにある。その昔、某六十六部回国者が苦行の末、結願しこの地で入定したといわれている。その後この人がいた窟に金銀財宝があると噂され、あばこうとした者には仏罰が下ったという。塚脇の石標には、享保15年(1730)に大乘妙典を納めたことが記されている。さらに下ると、やがて道は丸山公園南側を迂回してきた農道と交差する。交点の右側手前、「霊泉」の看板の足元には小さな井戸がある。ここに出ると県境は目前である。

コンクリート橋の架かる小さな川が奈良と三重の県境。以前は丸木橋だったそうである。もちろん一般国道のような標識はないが、谷を隔てて左手遠方の国道に立つ県境の黄色いゲート「気をつけてお帰り下さい。これより三重県です」はよく見える。宝来講ではこれをバックにして(運がよければサポート車の姿も入れて)の記念撮影が恒例となっている。ちなみに国道は、敷津まで通ってきた369号線と、上野・名張～飯南・勢和を結ぶ368号線が重複した区間。厳密には、「368・369号線」だが、標識はこれ以後「368」のみになる。

杉平・払戸

田や畑の畦道をまわって行く。左手に段々畑と、天気によければ大洞山の後ろ姿を遠望できる。再び林のなかに入り、谷を渡って小さな坂を上ると民家の庭先に出る。三重に入って最初の集落、杉平である。民家の敷地を、庭の一番奥から門へと抜け、道へ出る。水溜めのある丁字路から右手を見ると、少し離れたところに愛宕山常夜燈が立っている。

直進して少し行くと、竿石に「太一」と刻んだ常夜燈が、左手コンクリートブロックの上、小高いところに立っている。道路拡幅工事のため移転されたものという。

ゆるい下り道を左にカーブして国道に出る。辻の左角に、「いせみち」と書かれた自然石型の小さな

道標があり、また平成5年(1993)に新設された腕木式の案内標も見える。榛原町の石造道標や飯南町のものとは違って表示が双方向になっており、伊勢向きだけでなく、奈良向きの道も案内している点はやい。この標柱はこの先、美杉村内のおもな分岐点に立てられている。

この三叉路を右折し国道をすすむと、まもなく杉平の中心部、^{きんぼり}三多気への分岐点に着く。三多気は国の天然記念物・三多気の桜で知られているが、宝来講は少々時期外れである。さらに国道を直進する。国道の左手に流れる川は伊勢地川である。

杉平から約800mで、消防器具庫の角から左へ分かれる道があり、未舗装の道が伊勢地川を渡って北へ伸びている。これが名張方面への旧道である。途中で杉平からの道に合流し、三多気に至る。本街道はこの消防器具庫の100mほど手前から国道の北側へ下りて、現在の家並の裏を抜けていた。しかし、名張道が改良時に嵩上げされ、旧本街道を遮断する形になったため、それより西側の部分は通行できない。現在は庭や畑になっているところが多い。

歩ける部分だけでも旧道を通ってみよう。名張道の盛土の東側に沿って下りると、新橋より一段低いところにある旧橋へ抜ける道と、右側の家並の裏手へ入る道とにわかれる。右側が本街道である。40~50mで右へ上って、尾田木工の手前で国道に合流する。合流点には三角柱の道標が立っている。天保14年(1843)「右なばり 左はせ すぐいせみち」の銘があるが、この道標の原位置は、先ほどの本街道と名張道の分岐点と思われる。

国道に戻って先へ進むと、道は徐々に下りとなる。三重交通^{はかいど}私戸バス停前、道の右側に、文政2年(1819)の太一常夜燈がある。

私戸の集落を抜けてすぐ、石名原^{いしなはら}に入る道が国道から分岐している。集落外れで目標となるものが少ないが、新設された案内標が右の旧道を指している。

敷津あたりから、しめ飾りを飾る民家が目立ち始める。飾りには「笑門」と書かれた札をつけるところが多いが、「蘇民将来子孫之門」と書いたものもあり、“注連の札”という。

石名原

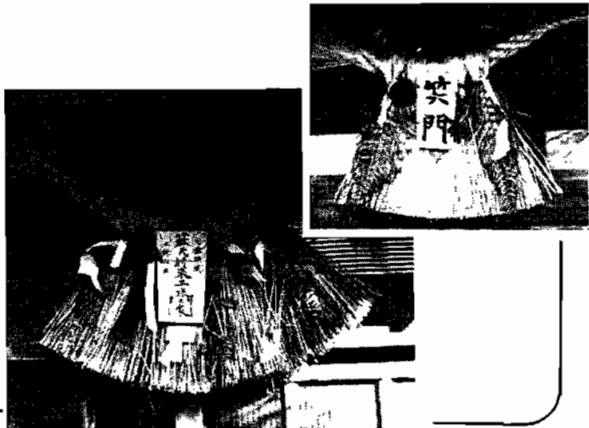
『菅笠日記』によると、本居宣長はこの石名原で一泊している。石名原の宿としては、中子家の旅籠が著名である。街道は古い民家のなかを伸びているが、まだ伊勢地方のような妻入り民家ではなく、

蘇民将来子孫之家

蘇民将来は巨旦将来の弟。巨旦に一夜の宿を拒否された素盞鳴命を歓待したところ、命はその夜疫病が村を襲うと予言、蘇民は命の指示に従い家を茅で取り囲んだ。翌朝、指示に従わなかった巨旦の家は全滅していたが、蘇民は疫病の災厄を受けなかったといわれている。札の由来は、命が蘇民の家を出るとき、茅の輪を腰に下げ「蘇民将来子孫」と記した札を家門にかければ災厄から守られると告げたことから来ている。一方「笑門」は「笑う門には福来る」を地地であったものであろう。

福来れ笑ふ家居のかざり縄

(『佐夜中山集』)



平入りの家が多い。石名原簡易郵便局と伊勢地農協前を通過、この付近は郵便局裏側の山手を行く道が旧道ともいわれる。さらに直進して橋を渡ると、直進する道、左に下る道に分かれるが、縁石が左に曲がっている。これに従って左折、坂を下って土蔵の角を右へ曲がる。いずれも「道なり」に進めば迷うことはない。

伊勢に入ってから三つ目の「太一」常夜燈があり、堀井モータース前に水神がある。掘抜橋を渡ると国道に出るが、この直前から右の下り坂へ入る。すぐに、国道から分かれてきた道と合流する。雲出川入漁券売場と書いた看板が目につく。雲出川はこの先の奥津で伊勢地川と合流し、JR名松線にそって伊勢湾に下る川である。宝来講の時期には関係がないが、この川は鮎漁の名所であり、6月の解禁日を過ぎると釣り客の姿が目立つ。

瀬之原バス停前にも「太一」灯籠が立っている。この付近から旧街道は右手の川沿いに分岐していたというが、現在は通行不能である。直進していくと境橋に着く。この橋を渡って国道に合流、右折して境橋バス停方向に行くと、50m先に川の方から合流してくる急坂がある。これが旧街道の名残である。

この付近の国道は改良が終わり、幅広く見通しがよい。しばしその国道を歩き「ジャスコ久居店36km」の標識と、まるや商店が建つ三叉路を右に入ると、奥津の家並に入る。

奥津

奥津は雲出川にそって細長く伸びる宿場で、上流の川上若宮八幡神社近辺に市場がたって繁盛した（「市場」は字名として現存）。市場は街道から離れていたものの、街道沿いに大鳥居があり、雲出川

川上若宮八幡宮

奥津から上仁柿まで、「若宮八幡宮」を示す道標を多く見かける。若宮八幡は、川上口の分岐点からさらに上流へ分けること7km、美杉村川上にある。雲出川のまさに川上である。祭神は仁徳天皇と磐之媛皇后だが、現在の形態は山岳修験的な性格が強い。この地方では伊勢神宮より厚い信仰があり、幕末にも神宮ではなく若宮八幡の神札が降ったという。川上の森林は伊勢神宮の御祖山でもあった。

代々の伊勢国司や、中世には北畠氏、近世には藤堂氏の崇敬も厚かった。北畠氏は多氣に本拠を据えており、川上は大和への幹線路の喉元に当たる。また津藩の藤堂家は領地を貫く雲出川を重要視し、水利や水運の開発に積極的であった。その最上流・川上は領内の把握に欠かせない場所だったわけである。

も宮代川と呼ばれていたという。途中、川上口バス停前の丁字路から、橋を渡って右へ分岐する道がある。これがその川上若宮八幡宮に向かう道で、分岐点東側には「若宮八幡宮参道」の大きな道標が立っている。

ここから街道筋左側には、古里屋・かぶと屋・山中屋という屋号を伝える古い家が並び、さらに新屋和平・江戸屋、そして尾張屋・柏屋が営業していた。突き当たりに、街道に沿って大きく広がって建つ商家（雑貨屋「ぬしや」）が見えてくる。左側の一段高い場所には八幡生活改善センターがあり、これに沿って左へ回り込むと、「はせ新街道」の大きな道

沿道のまち◎ 美杉村（三重県一志郡） 人口 8,673 所帯数 2,824 面積206.70㎢

〔沿革〕 明治22年成立の多気・八知・八幡・伊勢地など7か村が昭和30年合併。「美杉」は創作地名。

〔概況〕 一志郡西部を占める大村。その名の通り林業が中心。雲出川が村域南部の源流から北に流れ、中心的な集落はこれに沿って立地。多気はこの本流から外れるが、中世北畠氏の本拠地として栄えた。

〔街道〕 村域中央部の伊勢地・八幡（奥津）・多気地区を伊勢本街道が東西に貫通。ほかに、名張への道やそれぞれの谷に沿う道、かつての城下町多気と伊勢平野と結ぶ道などがある。宝来講では、西から県境を越えて当村に入り、本街道沿いの各集落を貫いて南東部の峠地区から飯南町へ抜ける。

標が立つ変則三叉路に出る。ここが伊勢奥津駅の入口になる。本街道はこの三叉路を右にとって鍵の手状に進んでいくが、宝来講では例年、駅に立ち寄って昼食としている。道標前をそのまま道なりに左へ曲がっていくと、ゆるい上り坂の正面に見えるのが伊勢奥津駅である。晴れていればこの駅前にシートを拡げての昼食であるが、雨の場合は八幡生活改善センターを借りている。

伊勢奥津はJR東海・名松線の終着駅である。しかし、もともとここを目的に建設された路線ではなく、名張と松阪を結ぶ予定で工事が進められていた。「名」張と「松」阪で「名松」線というわけである。伊勢奥津まで開業したのは昭和10年(1935)。ここで工事は頓挫し、奥津は「仮の終着駅」として50年以上も過ごしてきた。このような事情では収支状態が悪いのも当然で、廃止こそ免れているものの、最近では次々と合理化が進められている。宝来講にもなじみ深いこの駅も、平成2年(1990)ついに無人化された。駅前の商店も廃業・移転するものが多く、その衰退ぶりは旅行者の目にも痛々しく感じられる。

さて、奥津には名松線のほか、名張からの三重交通バスも乗り入れている。宝来講にとっては山間部での貴重なアクセス地点となるため、「奥津から」や「奥津まで」という部分参加者が多い。その意味でも、宝来講にとってなじみ深い場所といえる。

飼坂峠

昼食を終え、飼坂峠越えに向かう。駅前付近の旧街道は、現在の家並の南側へ回り込んでいたが、この部分は道が消滅している。駅を背に歩いてくると、街道との合流点正面に「ぬしや」があるが、もとの旧道はこの少し西側から雲出川の方へ下り、川沿いに宮城橋へ出ていた。

現在の道は「はせ新街道」の道標から東へ進み、家並の間を抜けている。蔵元「稲の玉」(稲森酒

造)前から右に折れると、宮城橋の手前で本来の旧道に合流である。橋を渡ると、ここからが須郷の集落で、かつては中北屋という旅籠が営業し、明治末期頃はにぎわっていたという。以前はこの付近にも「笑門」の飾りを付けた家が多かったが、最近は一一般の正月飾りが目立つ。

須郷から谷口にかけて道は登り調子になっていく。名松線の踏切から伸びてきた道が左側から合流すると、左側に谷口集会所があり、さらに集会所から50mほど先の左側に太一常夜燈が建っている。正面には「円通山」の扁額をかけた曹洞宗正念寺の立派な山門が見える。左眼下には、雲出川と名松線が左へカーブして北に向かう。この谷を進めば、奥津の属邑であった波籠があり、さらに比津へと至る。比津からは、北畠氏の居城・霧山城の足元を抜けて下多気に至る比津峠越えの道があり、この途中にも文化12年(1815)銘の太一常夜燈が残っている。近世にも比津峠越えが利用されていたことを示す遺物である。

正念寺を左手に見ながら谷口の集落を過ぎて、飼坂トンネルの工事中の道路に入る。トンネル新道の開通まではこちらが国道であった。途中、左折して国道へ合流する道路が付いているが、旧道はその

「笑門」異変

以前は須郷付近にも「笑門」を掲げた家が多かったのだが、第7回ではごく普通の正月飾りばかりとなっており、「笑門」札を見慣れた古株参加者は驚かされた。事情を聴くと、どうやら主体的に「笑門」を掲げていたわけではなく、たまたま行商車が持ってきたお飾りを、慣習に従って一年間飾っては替えていた、というところが実態のようだ。行商車の仕入経路が変わり、伊勢地方のお飾りが入ってこなくなると変化が起こったらしい。

カーブの曲がりっぱなから右へ。山ひだ沿いに左へカーブすると、右手に大きな砂防ダムがある。昭和49年(1974)8月作製的美杉村都市計画図を見ると、この砂防ダム付近には、現在の道の南側に砂防ダムで分断された道が表現されている。おそらく、このダムの下に以前の旧道が埋もれているのであろう。少し行くと小さな橋があり、これを渡ると緩い上りになった直線コースが続く。もともとの旧道ではなく、牛峠東側と同様、人工的な感じを受ける道である。平成3年(1991)春ごろまでは、このあたりから右下の川を覗くと、使われなくなったコンクリート橋がそのままに残されているのが見えていた。残念ながら今は撤去されて、橋台だけとなってしまったが、これも一世代前の旧道の遺物であろう。しかし、橋跡の前後の「旧・旧道」は、目視できないほど痕跡がうすくなっている。

二つ目の橋から先の区間は、平成4年(1992)に舗装された。三つ目の橋とのちょうど中間あたり、右側に首切地蔵がある。少しわかりにくい場所だが、平成5年(1993)案内看板が新設された。三つ目の橋を渡ってしばらく進むと、砂防ダムに突き当たりここで車道は終点、これを左側へ渡る。さらに上ると谷は国道の築堤にはばまれて行き詰まる。法面には、西側へ切り返して急傾斜の道がつけられてあり、国道へよじ登る。上に出ると右手に飼坂トンネルが大口を開いて待っている。

飼坂峠は本街道で一、二を争う難所である。本居宣長もこの峠を越えるにあたっては、無理をせず駕籠に乗っており、徒歩で越える人を見て、「とばかりゆきては、いきづき立やすらひつゝのぼるを見るにぞ、くるしき思ひやられぬ」と述べている(『燈台』)。宝来講にとっても、本隊は峠越えで難儀、当然ながら車両通行不能のためサポート車も比津峠へ大迂回。隘路中の隘路であった。平成元年(1989)開通の飼坂トンネルは、延長700m。車なら1分程度で通過できるようになり、サポート車の運行にもずいぶん余裕ができた。トンネル開通以来、西口前で本隊・サポート車が合流するのも慣例となっている。しかし、本隊はあくまで「旧道主義」であり、たとえ向こう側の出口が見えていようと、これを行くわけにはいかない(Ⓜ)。

サポート隊の声援を背に、国道の左わきに入る。路側に2基ある配電設備のうち、トンネル側の配電箱の横を抜ける。奥にある階段を降りてコンクリート橋を渡ると、クマザサに半ば没した山道に入る。クマザサは道の部分だけわずかに切り取られ、その切株が数センチ地面から伸びている。登りだしてしばらくは谷道である。左に杉林、右に谷を見ながら徐々に登っていく。途中、分岐点が一か所あるが左は林道、本街道は右にとる。この区間は崖崩れや路肩崩れで年々狭くなり、足もとがおぼ

飼坂トンネル利用術

ただ、あくまでも原則は原則、トンネルの利点を生かした参加者もいた。伊勢奥津で合流予定のある途中参加者。バスの時間の都合で本隊の出発時には奥津に着けなかったが、本隊が飼坂越えで時間を費やす間に彼はトンネルを直行。上多気で休憩中の本隊に合流を果たした。第8回では、足を痛めた参加者がやはりトンネル直行で時間差をかせぎ、本隊より先行。そのぶん速度を落として歩く、という新しい利用法が登場した。

つかない。とくに、途中にある丸木橋付近は荒れ方がきつ、橋を渡った先には大きな段差ができています。ただ、ハイカーが増加しているためか、橋そのものは年々広くなり、橋板のような横木も付けられて、いつの間にか「丸木橋」とは呼べないくらい本格的なものになってきた。

これを過ぎて20mほど登ると、左側に腰切地蔵がある。岩山から生えた木の根元に置かれており、周囲も像も苔蒸して保護色状であるが、ここにも看板が設けられた。頭がないのでこれが「首切」かと思いたくなるが、この頭部はいつからかなくなったということである(『歴史の道調査報告』)。

この先から、谷筋を離れて切り通し道となる。この部分は以前から沢のような道だったが、平成5年(1993)夏の豪雨で表土を流失し、地山の岩盤が露出してしまった。靴では岩盤表面をうまくホールドできず、かなり歩きにくい。しばらく登ると別の谷と合流。丸木橋から200mも行くと、正面に宝来講と伊勢迄歩講の案内標が立っているのが見える。谷に沿う直進側の道は行き止まりで、本街道はここから右へ鋭角に切り返し、今までとは一転してつづら折りで尾根へ取りついていく。尾根線を右へ左へと乗り越すような登り。杉林の間に先行の人影が見えるが、すぐかくれて消える。両手は踏み出す足のひざを押し、前傾姿勢のまま視線は二、三步先の地面を見定め、数歩登っては息を継ぎ、腰を起こして先を見る。体はじんわり汗を覚える。まさに『菅笠日記』に記述されたる如く、息を切らしながら登っていく。尾根道が終わると西向き斜面を登る道となって、さらに数回つづら折りをくり返すと、ようやく正面に峠が見えてくる。奥津駅前から1時間弱の難所越えである。少しわかりにくい、峠の50mほど手前、最後の右カーブ左側には、小さな自然石の大日如来碑がある。

中世北畠氏の「看監所」があった(巖窟遺蹟)といわれる峠には、近世となって茶屋が設けられ、旅人の疲れを癒した。明和5年(1768)の「幸講定宿帖」には「池田屋清吉 茶屋二軒あり」と記されている。道の両側の山頂部がわずかにひらけており、茶屋の跡かと思われる。しかし往時をしのぶ遺構はなく、太さの不揃いな杉の木が立ち並び、足元は小枝や細かい杉の葉でおおわれている。茶屋があったころは、名物のちから餅を売る下女が、さかんに呼び込みをしていたというが、今は地面にじかに座り込んで、ようやく一時の休息を得るのみである。

峠の向こうは上多気^{かたがけ}の里である。しかし第6回(1991)では、ここで予想外の光景に出会い愕然とした。山の片側斜面全体の樹木がなぎ倒され、山肌もあらわとなっていたのである。計画的な伐採だったようだが、美しくしっかりした林ただけに印象の変化が非常に大きかった。しばらく裸の状態が続き、表土の流出などが気になりはじめていたが、平成5年(1993)、ようやく若い苗木が植えられた。まだ林と呼べる状態ではないが、ひと安心である。また、この伐採・植林のために、この峠から上多気^{かたがけ}や立川^{たてがわ}地区の一部を見通すことができるようになった。はるか眼下には、立川^{たてがわ}～奥立川^{おくたてがわ}方面へ伸びる国道368号線新道の建設現場が見えている。

この「禿げ山」の部分を、2回ほど切り返ししながら下る。これを過ぎると、上りにもあった堀を割ったような道になる。やがて堀割は左側の尾根を乗り越えて、さらに左へカーブしていく。ひとつ北側の谷へ入ってきたわけである。尾根を越えてからは、また3～4回ほどつづら折りを繰り返して下り、最後にきつい下りで谷の縁へ出てくる。以前はこの位置から対岸へ橋が架かっていたが、現在は石組の橋台跡だけが残っている。橋を失った道は、20mほど谷を逆行して丸木橋で左岸へ渡る。峠西側の橋と同様、この橋もまた横木が付けられて本格的なものになってきた。あとはほぼ一本道である。途中から道幅がぐっと広がり、焚き火の跡など林業関係者の「痕跡」もふえる。生きて使われている道、という感じがする。

右手の林を通して国道が見えてくると、上多気も間近い。道は国道に合流しているが、もとは現在の国道北側切り通しの中腹付近^{のりかべ}を通っていた。この切り通しの法面は、茨がきつくて現在は通行できない。いったん国道に合流してから、初めての分岐を左へとれば、旧道に復する。分岐点には地元有志による木製の案内標が立っている。

上多気

飼坂峠を下り上多気の宿場に入ると、奥津とはまた違った趣を見せる。川沿いに長く続く奥津に対し、上多気は中央に走る八手俣川をはさんで、谷町と町屋にわかれている。多気は中世、花富氏の本拠地として栄えていたが、当時を今に伝えるものは少ない。中世には上多気・下多気の区分はなく、現在の両大字にまたがって城下町が構成されていたが、近世となって上多気は紀州藩、下多気は津藩と領主が分かれ、村分けが行なわれた。

四方から山がせまって平地部分は少なく、街道筋の古い民家にも二階建ての家が点在する。坂を下りてすぐのところに、街道左側に沿って階段状に塀を作っている大きな家（斉藤家）がある。塀内の建物は離れ座敷で明治42年(1909)建、坂を下りた本屋敷は、天保8年(1837)の谷町大火で焼失したのを翌年建て直したものである。この家には明治32年(1899)頃の山駕籠が保存されているが、もっぱら医者を送迎用だったという(毘納)。坂を下りたところで、新田橋(平谷川)を渡り、谷町の家並に入る。街道沿いには、窓の小庇瓦に龍の装飾瓦を用いた蔵を持つ辻村家もある。

美しく、落ち着いた谷町の町並を進むと、大きな自然石の道標が立つ十字路が見えてくる。道標は表に「すぐいせ道」、裏側には「すぐはせ道」と刻んでいる。嘉永6年(1853)の建立で、上多気のシンボリック的存在である。十字路で本街道と直交しているのは、県道一志美杉線で、左へ行けば下多気から一志町方面へ続き、右は丹生俣で行き止まりとなる。

道標の角に建っているのは、かつて三木屋(三鬼屋とも)という屋号で知られた宿屋であった。軒や手すりに往年の風情を残しているが、昭和35年(1960)頃から店を閉じている。とくに最近では荒廃著しく、平成5年(1993)、ついに屋根全体がシートで覆われてしまった。道標の向かい側、石垣の上には、常夜燈がおかれている。これは近年整備されたもの。もともとここが旧位置だというのが、整備される数年前までは、ここにも家屋が建っていた。この付近には北畠時代の馬場があったといわれ、現在も「馬場橋」にその名を残している。

『歴史の道調査報告書』によれば、街道はこの道標の十字路を直進、八手俣川にかかる大橋を渡っ



「すぐいせみち」

といっても、伊勢道がこの近くにあるという意味ではない。この「すぐ」は「すぐ近く」の「すぐ」ではなく「まっすぐ」の「すぐ」なのである。現在では「すぐ」だけで「直線状」を示すことはないが、辞書類を見ると、「すぐ」の項に「まっすぐで曲がっていないさま」という説明がある。例として引用されているのは古典ばかりで、これに対して現在の用法「時間を置かないさま」「距離を置かないさま」の例は明治文学以後のみである。これで全てとはいえないが、大まかに分けて近世以前は「まっすぐ」の「すぐ」、明治以降は「すぐそこ」の「すぐ」といえる。考えてみれば「真正面」の「真」がなくても「正面」の意味は変わらない。「まっすぐ」も元は同類だったのであろう。

上多気 三木屋前の道標



北畠氏庭園（下多気）



比津峠の太一燈籠



美杉ふるさと資料館

北畠神社 美杉ふるさと資料館

「すくいせ道」の道標の辻を左へ折れ、街道を外れて500mほど行くと、北畠親房、顕家、顕能をまつる北畠神社がある。境内は、中世伊勢の国司として栄えた北畠氏の居館跡で、現在も残る庭園は、国の名勝史跡に指定されている。

神社の西方約1.5kmの山頂には、興国3年(1342)に北畠顕能が築いた霧山城跡があり、標高600mの城跡からは奥津や三多気のあたりまで見渡すことができる。

また、北畠神社の手前、山側の小高いところに建っているのが、美杉ふるさと資料館。ここでは美杉村に関するさまざまな知識が得られる。中でも伊勢街道に関するコーナーには、太郎生の宿屋三國屋が所蔵する多くの資料が提示されており、伊勢路を旅する際、一度は見ておくとうよいだろう。

上多気は本居宣長の先祖ゆかりの地でもあり、『菅笠日記』の旅では上多気の中世北畠氏の旧跡を訪ね、「むかしの絵図」と「つかへし人々の名どもしるしあつめたる書」を見せてもらっている。資料館にはこの「むかしの絵図」に相当すると思われる「多気城古図」なども展示されている。近世に作製されたと思われ、中世史料としての価値は認められていないが、近世の景観・伝承をベースにしていると見れば、それはそれで興味深い。

飼坂越えて汗をかいたあとは、ちょっと一服がてら、資料館や庭園でリフレッシュ。身体ばかりを使う旅の途上、たまには頭脳労働もよいのでは…。

てすぐ右折し、川沿いを進んで角屋（村林家）から国道368号線に入る。しかし今の国道は家一軒分通り過ぎてから右折して、角屋・亀屋・吉野屋・大嶋屋を通る。この付け替え部分にある齋藤家は、玄関が国道側に向いていない。街道に面して玄関を設けるのがほぼ常識なので、一見すればこの庭先を街道が通っていたことを想像できる。

旧旅籠の亀屋には講札が残っている。昔は草葺屋根だったという（葺）。付け替え部分は上り坂になっていたが、このあたりはほぼ平坦になっている。右手には現在も営業を続ける旅館結城屋がある。三木屋前の道標の揮毫は、この結城家の先祖ということである。ゆるい左カーブの細い道を行くと、食料品店の前で今度は右へカーブ、以後街道は立川川に沿って櫃坂に向かう。

町屋地区と立川地区との間に六部供養塔がある。元禄13年(1700)に作られたもので、県境の六部塚より30年前のものである。

立川

立川の元旅籠・車屋は文政から明治中期まで営業していた。建物は街道に沿った平入、建築は文政年間(19世紀前半)と考えられている。数多くの旅籠引札を保存しており、榛原のあぶらや、奥津の新屋和平、車屋自身のものも見える。「餅屋千軒、旅籠五千軒」と称された、激しくまたはなやかな街道沿いの商業活動がしのばれる。

街道を進むと、右側の路傍に東屋ようかんの粋な看板が立っている。杉の木一本丸ごと使い、雨除けに小さな入母屋の屋根がちよこんと乗っかっている。

一度家並が途切れて、小さな川を渡る。左側の少し高い所に、庚申塔が祀られている。これを過ぎるとすぐ、左手に上る細い道がある。これが旧道で、この区間にもまた2～3軒の家が並んでいる。現在の国道は明治38年(1905)ころ付けられたものという。100m少しで国道に合流、道の右側の空き地が「サカムカエ」場である。サカムカエとは本来、村を出て神界に旅するものを送迎する（「境迎え」）宗教的儀礼である。代参による伊勢参宮が多くなるにつれ、宗教儀礼として整備される一方、神霊を頂いた神札を持参する代参者を神と同格の存在として扱い、出迎えた人々と共同飲食する「直会」を行う場となってきた。もっとも後年には、宗教的な行事よりも共同体としての行事に重点がかけられるようになり、飲食の持つ比重のほうが高くなっていった。立川のサカムカエはあらかじめ酒宴をはって代参者を待ち、帰ってくると伊勢音頭も高らかに、連れ立って家路につくといった様子のものであったらしい（歌の謡謡誌）。

サカムカエ場のすぐ東側には、馬頭観音がまつられた小祠がある。この付近は立川のみならず、立川の属した上多気村にとっても、一種の宗教的な境界線だったのであろう。

奥立川

奥立川は2～3軒づつの小さな集落が5か所ほどに分かれて立地している。全体で「奥立川」という字である。

立川を過ぎると、左手に山が迫り、右手には川が寄ってきたり狭い耕地があらわれたり繰り返す。正面に高い崖が立ちただかって右にカーブする、という地形を何度も通るので、ぼんやりし

ていると妙な既視感に襲われる。

サカムカ工場から約200mで、奥立川初めての小集落があり、民家が数軒ある。周辺では新国道建設工事が進められており、右側・川の対岸には現在の道と直交するような形で新しい路盤が姿を見せている。工事が開始された区間以外でも、その準備として木が伐採されており、木の伐られた部分を目で追っていくと、大体の予定コースがつかめる。

さらに約300mで小規模の製材所があり、約300mでまた小集落がある。集落入口付近から左手の山に入る道が分岐しており、分かれ道の辻に「右いせ 左やま道」の道標が立つ。付近はもともとこの道標が示す二本の道の分岐点だったが、現在はその中央に二車線の新道が通って三つ股となっている。一番右側、ゆるやかな下りの道が旧道で、小集落が終わるとすぐ新道と合流している。

ここを過ぎると平地はほとんどなく、整然と植林された杉林の中に、林業関係の家屋や製材所、小規模な貯木所などが数百mの間隔をおいて点在する。林道も多数分岐している。「美杉」という村名の由来を知る思いがする。

道は幾重にも蛇行を重ねつつゆるい上り坂となる。同じような形状のカーブをくり返すため、地図を一見しただけでは、現在位置がどこであるか分からなくなってくる。しかし、国道そのものは一本道で、迷うような箇所はない。

「NHC美杉山荘」という看板のかかった民家の前を通過。入口はかたく閉ざされ、長年放置の感がある。山荘というが、どのような利用のされかたなのであろうか。

峠 無住集落

奥津から約9km、「おこしなして飯南町」の看板が立つ町村境を越え、^{とどろ}不動橋を渡ると、^{とどろ}峠の集落に入る。橋を渡った先の左側には小さな祠があり、享保4年(1719)の常夜燈が立っている。

ここは、その名のとおりに「峠」に位置している。上多気からここまでの道はほとんど平坦に感じられるが、実際には立川川の上流へと遡ってきており、標高320mの上多気から430mの峠へと、気付かぬ間に110mも上っている。しかし「峠」へ上ってきたからには下りがある。この集落を抜けてかかる下り道が、銅坂峠や鞍取坂と並んで恐れられた^{しづか}櫃坂である。『新撰伊勢道中細見記』では、この付近の地形について「^(多気)たげより自然上りにして^{しづか}峠より下り坂^{りんせ}險なり」と記している。初瀬以来、峠の上り下りに一喜一憂してきた本街道の旅だが、峠らしい峠はこの櫃坂が最後である。

集落に入っていくと数軒の家屋が並び、ごく普通の山村のように見える。しかし、どの家も雨戸を固く閉ざしており、人の気配はない。この峠地区は、昭和50年(1975)に廃村となり、現在はまったくの無住である。上多気へ出るには距離があり、^{かみ}上仁柿へ下るには櫃坂の難路が控えているという、非常に中途半端な場所である。ここに住み続けて買物など日常の用で不便をするのも、町に住んでここ

沿道のまち◎ 飯南町 (三重県飯南郡) 人口 6,957 所帯数 1,911 面積 76.33㎢

〔沿革〕 明治22年柿野村と粥見村が成立。その後それぞれ町制を施行。昭和31年両町合併で飯南町。

〔概況〕 周囲を山に囲まれた農山村で、町域の中央を櫛田川が貫流する。おもな集落は櫛田川に沿って立地。ちなみにこの櫛田川は中央構造線の川である。

〔街道〕 櫛田川に沿って和歌山街道が町域を東西に貫通し、北西部の美杉村境から当町に入った伊勢本街道が町内北部の横野でこれと合流。一方、和歌山方面からの伊勢参宮のために、粥見地区から伊勢への直行路、伊勢南街道もあった。宝来講は、町北部の柿野地区を西から東へ横断し、松阪市へ抜ける。



峠にあった道標

(昭和54年撮影 現在は所在不明)

かつて、この辻には「ひだりいせ」と刻まれた道標があったのだが、昭和55年(1980)ころ盗難にあり、所在不明となっている。これも廃村となったことの影響のひとつといえようか。

櫃坂

本街道は村上屋の辻を左折、櫃坂の下り口へ向かう。左、右、と曲折、もう一度左へ曲折する手前の右側に「伊勢本街道 ここは飯南町です」と記した素木の案内標柱が立っており、赤い矢印が右を示している。これが峠道の下り口で、標柱は平成4年(1992)に新設されたもの。ほかに宝来講の案内標も立つ。第2回(1987)以来目印となってきた「上仁柿へ近道です」の案内板は、標柱新設で道の左側へ移設された。たくさんの表示に見送られて国道を離れ、傾斜のきつい山道に入る。

山ひだに沿いに左へカーブしていく国道とは反対に、旧道は下りながら右へまわり込んでいく。2～3度つづら折りを下ると、尾根を乗り越えて一本北の谷に入る。橋がないので谷を逆行、谷の突き当たりで対岸へ渡る。先ほどの飼坂峠の下り道かと見まごうような、そっくり相似形の道である。ただ、これも平成2年(1990)の台風の影響か、この突き当たった部分の表層が大きくえぐられ、景観は一変。樹木・表土も流されて岩盤が露出し、谷の流れは滝状になっていた。以前丸木橋が架かっていたあたりに、ちょうど土砂の段があって道がついているが、まだ不安定なためか、かなり歩きにくい。谷の北側(左岸)に出ても、土砂が崩落している部分がある。

これを過ぎると、杉林の中を下るつづら折りの道となり、どんどん高度を下げていく。初瀬から西峠への上り以来、アップダウンはしながらも標高250mを下ることがなかったが、この峠でいよいよ伊勢平野への入口にたどり着いたといえるだろう。

下ることおよそ15分、谷の底に達する。砂防ダムをひとつ越えると、さらにもうひとつの砂防ダムを建設中(平成5年10月現在)で、これが旧道をふさぐような形になっている。右手に工事用道路兼迂回路が設けられており、完成の際には現在の左岸側旧道が通行できなくなることも考えられる。

従来通ってきた旧道は、この建設中のダムの向こうに続いている。旧道を行けば、右手に谷底の狭い耕地が見えはじめ、さらに山ひだに沿って左へまわり込むと、上仁柿の集落が見えてくる。納屋らしき建築物が2、3軒建っている裏手を抜け、コンクリートの板橋で仁柿川を渡ってアスファルト舗

装の林道に合流する。橋を含めると変則四叉路になっているが、橋の前から左へ下る道が横野へ続く本街道、右側手前の道が建設中の新ダムから続く砂防工事用道路、右奥の道は古坂を下ってきた道である。橋を渡ってから川向かいを見ると、石垣にもたれるようにして「右はせ道 左若宮八幡宮」の道標がある。「若宮八幡宮」は、川上の若宮八幡神社のこと。移動しているのか、位置関係はおかしいが、「はせ道」は櫃坂経由、「若宮八幡宮」は古坂経由を示しているのであろう。最後の峠らしい峠もこれで終わり、あとは櫛田川沿いの平地を目指して、だらだらとした下り坂が続いていく。

古坂峠

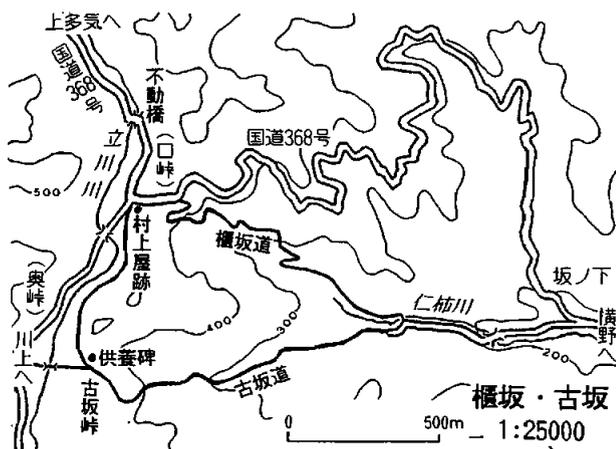
『勢陽五鈴遺響』によると、口峠地区から下る現在の櫃坂は、寛文中(17世紀後半)「大神参詣ノ輩ノ為」に開かれた。それまでは、奥峠地区からの古坂(ふるか)が利用されていた。

もともと古坂は、北畠時代の幹線路に当たっている。大和宇陀郡方面から、雲出川最上流の坂本、川上を経て、丹生俣から櫛田川沿いへのルートである。しかし、江戸初期に現在の本街道が定着すると、古坂経由はずいぶん迂回になる。そこで短絡路にあたる櫃坂が開かれたのであろう。ちなみに古坂と櫃坂は、峠頂上を基準とすると延長・比高とも大差ない。

古坂への道は、村上屋の辻が入口である。辻を直進して未舗装の林道に入り、すぐのY字路を左の細道にとる。立川川の流れを右に見て進むと、道は徐々に流れから離れて左側の斜面に取りつき、やがて稜線の切れ目を見つけて頭を突っ込んだ、という形で左へ曲がる。ここが古坂峠である。道は上下二段になっており、口峠からの道は上を通る。すぐ下方を通っている道が、川上・丹生俣方面からの道である。上の道のさらに上方には、延宝8年(1680)の供養塔がある。櫃坂が開かれたのちのものである。

峠のすぐ東で2本の道は合流、下りにかかる。林のなかを道なりに下っていくと、何本もの伐採木が連続して道を塞いだ区間に出る。潜ることも跨ぐこともできず、避けて通るしかない。木はすでに苔蒸しており、どうやら伐採したまま放置されているようである。これを抜けると、今度はどこが道か判別できないような植林山に入り、なだらかな坂を下る。ぐるりと左へカーブすると、谷の上流部に出てくる。もとは谷の対岸へ渡っていたのであろうが、この谷が数十mにわたって崩落しており、ここは我慢の沢歩きである。耐えて下ると、やがて左岸に道が現れる。これを進むと道はまた左へカーブし、別の谷の上流へ出る。こちらはおだやかな谷のように見えるが、これもまた対岸へ渡ってすぐのところまで2ヵ所ほど崩落している。これをやり過ぎると、ようやく普通の山道となって歩きやすくなる。しばらく下ると、櫃坂を下りて来たかと思うような景色になる。最後に砂防ダムをひとつ越えるのも櫃坂とそっくり。ここで舗装路となり、急坂を下りていくと、上仁柿である。櫃坂が車道へ出ると同じ辻に、一番南側から合流する。

現地踏査は平成5年(1993)10月に実施したが、道の状態はかなり悪い。また、山そのものにも手が入っていないようであり、近いうちに通行不能となることも否定できない。



古坂峠の伊勢初瀬隔夜供養碑

“日没”

毎年櫃坂を越えて上仁柿、下仁柿に入るととっぶり日が暮れている。“日暮れて道遠し”という言葉をかみしめつつ黙々と歩くわけだが、第6回は時期を少しずらしたため、雨天ながらまだ明るいうちに宿に着けた。『理科年表』によると2月から3月にかけての期間は10日につき約10分前後日没が遅くなる。わずかな差かもしれないが、道中での心理的効果は大きかった。そして天体の運行がこの数百年で変動したとは考えにくいから、かつてこの街道を上下した人々と同様の思いをいただいたと言えるかもしれない。

上仁柿

坂の下の民家でトイレを借りる。ここで熱いお茶をいただくのも、たびたびのことになった。第6回(1991)では、小学生くらいの女の子が戸を少し開けて、はずかしそうに、そして興味深げに一行をのぞいていたのが印象的だった。坂の下の集落からゆるい下り坂であるが、今日の宿、待月までまだ5kmはあるのだ。第2回(1987)の時には、すれちがったトラックから「あと30分！」と励まされて安心したものの、実際は倍以上かかった。そして同じ道、同じ行程が眼前に続いている。

短い坂を上りきると、商店の前に出る。右手に「右若宮八幡宮道」という道標があるが、明治に建てられたものである。この道標の前で、勾配緩和のために大きく迂回してきた国道と合流する。

吹ヶ野に入ると、左手高台の高福寺に至る道の分岐点に「右いせ 宮川へ九り」の道標が立つ。これに従って直進、このあたりから妻入の家が目につき始める。なかには妻入の家と平入の家が合体した民家もある。どちらにも入口があり、妻入の家のほうが古いのではないかと思える。

吹ヶ野をすぎ、茶屋の集落に入る。ここには江戸屋久世市右衛門の宿屋があった。「茶屋」の名が残るところをみると、茶屋・立場集落として機能していたのであろう。神名原川と仁柿川の合流点近くに架かる橋は、その名も「茶屋橋」。旧道はこの橋を渡って直進である。この手前で、神名原からの道が合流、道も三叉路となっているが、この三叉路の股に道標が倒れている。明治16年(1883)に建てられたもので「右あらき道 左はせなら道 すぐいせみち」と刻む。仁柿川にも橋が架かっている、これを対岸に渡れば延伸工事中の新国道が通っている。ここから下流側は供用が開始されているが、峠側はまだ開通していない。いずれは飼坂トンネルに接続する予定であろう。

さらに旧道を進むと、長瀬の安地蔵碑が左に現れる。ここの岩場の小道を登れば子安地蔵尊の小祠がある。街道はこのまま直進する。

左手に仁柿小学校がある。しばらく進むと左側から崖がせまり、右側は仁柿川が道と並行して流れる。左側の道端に、役目を終えたいしい唐箕が放置されている。さらに直進すると、落石覆いをかけた先の左側に長瀬弘法と太一常夜燈がある。ここを過ぎると、谷の対岸を並走していた新国道が仁柿川を渡って、旧道と直交。新国道はそのまま尾根を大きく切り通して右カーブ。旧道は川沿いを進み、すぐ新国道に合流している。

下仁柿

小さな杉林を抜けて下仁柿に入る。『伊勢道中案内』によれば、ここの定宿名は大文字屋善兵衛である。右側の山が切れて平地が広がると、樋山からの道と合流。左側の畑の前に「仁柿小学校跡」の説明板が建っている。これを過ぎて200m行くと、左側に下仁柿生活改善センターがあり、ここから弧状に80mほどの旧道が残る。

製材所が非常に多い。さきほどの旧道から約200m、斉藤材木店の角から川沿いへ向けて右折する

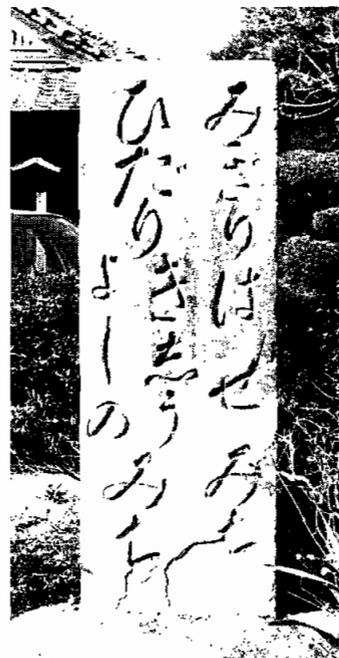
道があり、これが旧道である。積み上げた材木で道が見えないため少々分かりづらいが、櫃坂旧道入口と同じタイプの案内標柱が立っている。宝来講では第6回(1991)まで、①この付近を通過するのが日没後になる ②列が延びていることが多い ③分岐点が分かりづらい——などの理由で、この旧道は通行せずだった。しかし「道中記」の調査過程で現地を確認したOBが増えたので、これらOBを「人間道標」として、第7回(1992)から本隊の通行を開始した。標柱の設置で、人間道標を置く必要もなくなったようである。

右に入ってすぐ、国道の20mほど南に大きな常夜燈がある。このすぐ足もとには自然石型の道標もあり、「はせ江十四里 宮川江八里」と刻む。この前でいったん左折、すぐ右折して100mほど行く



斉藤材木店の先に新設の案内柱が建つ

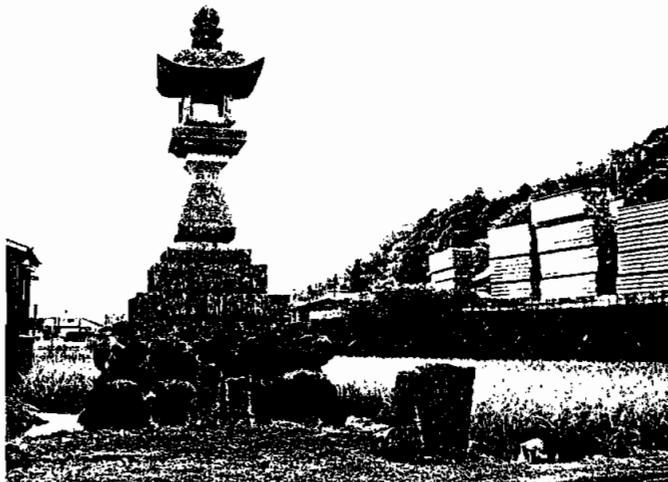
待月の向かい・三井菓子舗の角にあった道標
(現在は宝積寺に移転)



〔下仁柿～横野付近の旧道〕

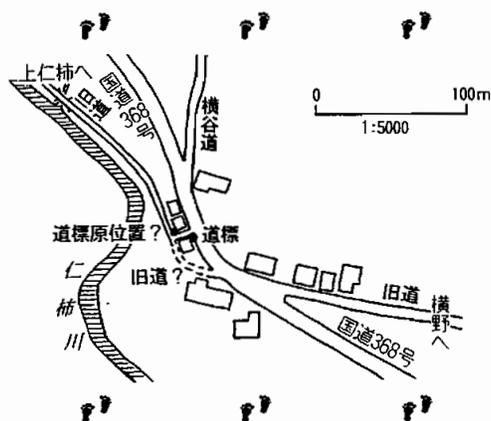
横野入口の地藏道標
(横谷からの道との合流点)

常夜燈と自然石型道標



と、突き当たって丁字路となる。これを左にとって、ここからは川沿いの細い道を横野へ向かう。この丁字路には菅野村行悦の回國供養碑が立っている。

道は車一台ぎりぎりの幅である。ほぼ一本道だが一か所だけ丁字路があり、直進側が本街道、左にとれば国道に戻る。これを過ぎると、本街道は仁柿川のすぐ際まで下りて行く。流れが美しい。この付近には宿屋もあったというが、火災にあって以来民家も少なくなり、少々寂しい所である。国道を離れてから約800m、六番組まで来ると、旧道の前方を乗り越すかのように、国道が左側から近づいてくるのが見える。道はその国道と同じ高さへ向けて急な登りになり、民家の庭先のような丁字路に出る。本来の旧道は、丁字路からこの民家の前を直進して、左から寄ってきた国道と合流、さらにこれを斜めに横断して左側に分岐する横野への旧道に入るものと思われる。ただ、民家の前を抜ける部分は完全に「庭」の扱いをされており、通行するのは多少気が退けるので、丁字路から左へ進み、家一軒分迂回して国道の変則四叉路に出る。国道に出た角の右手手前には「右あらき よこ谷道 すぐはせへ十五里」という地藏道標が立っている。国道を上仁柿方面に振り返れば、右へ分かれているのがその横谷道である。



『歴史の道調査報告書』では、この迂回ルート
を本来の旧道とする。報告書によれば、地藏道
標はもともと国道の反対側にあったといい、こ
れが旧道決定の根拠となっているようである。
しかし、報告書のいう旧位置では碑文の「すぐ
はせ」「右よこ谷」と矛盾する。道標の原位置
はさらに別の場所ではないだろうか。碑文から
いうと、本来の旧道は丁字路を直進し、道標も
この丁字路にあったとするのがもっとも適当で
あろう。

さて、道標の角から国道を進むと、すぐ三叉路があり、細い道が左斜めに向かって伸びている。これが横野への旧道である。分岐点には、飯南町による案内板が立てられている。場所に余裕があるためか、欄干入口や下仁柿のような円柱ではなく、看板状のものだが、素木に筆文字でイメージは同じである。旧道に入ったところで振り返ると、国道の向こうに「庭」の部分が見えてくる。

横野

横野には一里塚があったらしいが詳細は定かではない。鮎のすしは有名で『新撰伊勢道中細見記』『伊勢道中案内』にも記述されている。

ここにも第7回(1992)から新たに通行を開始した旧道がある。横野への道に入って約300m、移転のうえ統合された柿野中学校の跡地が右側に広くあいている。このすぐ手前、雑貨屋(西村商店)の前から左側へ斜めに入る細い道が見える。厳密に言えばこの一軒手前の森家前からであろうが、現在は途切れている。「車は軽四まで」「老人子供の道です」という看板も入口の目印になる。たしかに道は狭く、見通しもきかない。車の通るべき道ではなく、歩く時代そのままに残されてしまった旧道

といえる。ゆるやかな坂を上って町民センターの裏を抜け、またゆるやかな坂を下ると、正面に柿野神社の杜が見える。道は神社に突き当たって直角に右折、町民センターの前を通ってきた道（現在は「表道」と呼称）と合流して神社の前へ出てくる。境内の道寄りには、移築されてきた太神宮常夜燈がある。ただ、付近の状況からすると、本来の道は神社の境内を抜けていたのではないかとも思われる。これについては、いわゆる「上道」問題とともに、翌4日目に歩く部分にまたがって問題となるので、改めて取り上げることにする(109頁参照)。今は目前の宿へ急ごう。

神社を過ぎるとすぐ、三井薬房の先に三叉路がある。左に上がる道が「上道」であり、大石から伊勢方面へと続くが、ここから先は明日の行程。今はこの道を右に下る。曲がるとすぐ前方に国道166号線との合流点が見えている。三叉路から国道との合流点まで左側に続いている建物が、宝来講の定宿「待月」である。柿野神社境内の太神宮常夜燈も、もとはこの道を隔てて待月の向かい側、三井菓子舗と国道の角にあったものだという。道標も立っていたが、現在は宝積寺に移設されている。

建物と看板の間から国道側に回り込むと、講札のかかる玄関が見える。「まつや」を出発以来、11時間近く。長い長い一日もようやく終わりである。玄関先、用意していただいた湯で足を洗い、タオルでぬぐう。人心地がついたところで玄関を上がると、おなじみのイノシシの刺製が、我々を出迎えてくれる。

宝来講定宿帳（其の参） 横野・待月旅館

「待月」のある横野には、現在でこそほかに旅館を見つけることができないが、かつては「仁柿屋」など、数軒の旅館が営業していた。横野は本来の宿場ではないが、伊勢本街道と和歌山街道の分岐点という地の利のよさが好条件となっていたのだろう。

現在の待月は昭和初期の創業であるが、それ以前にも「枕水(まくらみづ)」という名の旅館が明治末期からここで営業していた。待月となってからも、この枕水時代の建物のまま営業しており、各所の造作に横野華やかなりし頃の香りを伝えていたという。残念ながら、老朽化などのため昭和49年(1974)に建て替えられ、当時の建物は姿を消した。

さて、宝来講にとっては、3日目夕方かひとつの試練。この待月がもう少しでも手前にあつたら…と思ったことがない参加者は、おそらくいないだろう。しかしそれだけに、日の暮れた道を歩いた末に見る、玄関の灯の暖かさ、安堵感は言葉に尽くせない。国道(166号)を流れる車も多く、心なしか「町に下りてきた」という印象を受ける。

宿の中では、飾られたたくさんのサイン色紙の額が目を引くが、われわれにとって一番気になるのは芸能人の色紙ではなく、「池講」のものだろう。昭和48年から11年間にわたり、大阪大学の有志・OBなどによって続けられた徒歩初詣講であった。記念写真を見ると荷物も全て自分で担う、本来の徒歩旅行であり、大阪YHの「伊勢迄歩講」同様、強者ぞろいであつたと思われる。残念ながら現在は途絶えているが、できることなら、池講OBの面々と、一度この待月で話してみたいものである。